

郷土の日本画家 徳田玉龍

【概論】

徳田玉龍の人生とその画業

～彼岸に達するも玄奥は尽きず～



徳田玉龍

大広間で個展を開催しています。また、山をテーマとして描くようになったようで、大分県にある景勝地耶馬溪の景色を描いたとされています。しかし、そのころの作品は本人が残した画歴・書歴に散見するのみで発見するに至っておりません。

明治43（1910）年の韓国併合に伴って26歳で朝鮮半島へ渡り、27歳の時に名勝金剛山に出会います。玉龍にとってその山は大変惹かれるモチーフであったようで、岩窟に居住し、山野をあちこちと歩きながら金剛山の風景を描き始めます。金剛山は朝鮮半島では古くから名山として知られる山であり、大変な景勝地であるとされていました。しかし、まだまだ人の手の入らないような秘境でした。天高くそびえる奇岩の数々、折り重なるような滝や溪谷は、日本の風景にはない魅力を感じたのでしょうか。その勇壮さに玉龍は惚れこみ、画題としたのかもしれない。

彼の作品は初代大韓帝国皇帝やその皇太子たちといった李王室の人々に好まれました。大正2（1913）年には作品を称賛され、金一封を賜ったと言います。その他にも、のちに第30代内閣総理大臣となって二・二六事件で斃れる当時の朝鮮総督府総督・斎藤実や、当時の朝鮮鉄道局な

ども買い上げられています。

金剛山の作品はその他にも、国内では大阪偕行社（戦前の旧帝国陸軍親睦組織）に渡ったほか、欧米人などからも求められており、題材とした金剛山の勇壮さを見事に表現したものであったと考えられます。しかし、この頃制作された作品は、引揚げの際に家族らの手であわてて持ち出されたものが少数残るのみで、その他人の手に渡った作品については、大多数が終戦直後の混乱の中で消息不明となってしまいます。

金剛山の思い出を抱きつつ、還暦を過ぎた玉龍は富士山に新たな題材を得て、富士山を描くようになりました。昭和22（1947）年から山中湖の湖畔などに長期滞在しながら、様々な表情を見せる富士山を細やかに描きます。時には先人の詠んだ富士山の和歌、俳句、漢詩などにもインスピレーションを受け、富士山を描きつづけました。第一巻の冒頭には玉龍自身の漢詩「富士山」が書かれており、漢詩の中には富士山の成り立ちや伝承などが見られ、長大な漢詩には玉龍の並々ならぬ熱意が込められています。数ある富士山の画の中には古典から題材を得たものや富士山の風景だけではなく、縁起物の描写なども見られます。こうして昭和29（1954）年11月、10巻からなる『富嶽百景』は完成しました。玉龍71歳の時でした。

昭和25（1950）年には秩父宮両殿下に拝謁し、金剛山と富士山を描いた作品をご覧いただく機会がありました。その後、昭和30（1955）年に秩父宮妃殿下のご台覧を仰ぎ上京するも不運なことに病に倒れます。この病が思ったより重く、昭和31（1956）年は療養生活を余儀なくされたようです。しかしその病にも負けず、玉龍は『蓬萊山と玉龍』という作品を描いています。この作品はおそらく彼の最後の作品といってもよいでしょう。その絵に添えられた漢詩には、山を描き続けた玉龍の万感がかもっています。この概論の副題にもある「彼岸に達するも玄奥は尽きず」は、この漢詩のなかの一節にあります。涅槃の境地にいた玉龍が、なお山の魅力、奥深さは尽きるものはないといい、次の句で「初心を懐憾するも未完に終わる」と、いまだ山を描く旅路が続くことを暗示しています。しかし、療養の甲斐なく昭和33（1958）年3月

に逝去、享年74歳でした。

残っている作品数も少なく、謎の多い玉龍ですが、彼の人生やその残された作品などから見えてくる姿とは風雅を求め山紫水明を愛する文人のような画家、というよりも何か修験の道に飛び込んだ修行僧のような厳しさが感じられます。名に龍を冠するように、『富嶽百景』に徐福伝説(司馬遷の『史記』にある、富士山にある不死の靈薬を求める伝説)を描くなど神仙思想に惹かれていたようにも思われ、何より自分を「蓬萊山人玉龍」と号したことなどからもその影響が見られるでしょう。そして、その世界観を

育んだのは、金剛山での厳しい岩窟での生活だったのではないかと考えます。これが徳田玉龍の思想的な背景ではないかと感じるのです。

郷土の日本画家「徳田玉龍」の魅力を多くの方に知ってもらいたいと思っています。しかしながら、彼の画業に対する研究は始まったばかりで、その思想的背景に迫ることは難しいのが現状です。彼の生涯をかけた作品を学術的・美術的な評価をするためにも、甘木歴史資料館では、今後も徳田玉龍に対する調査を行っていきたいと思っています。(副館長：遠藤 啓介)



蓬莱山与玉龍

蓬莱山と玉龍

金剛靈嶽鮮東を曲がり

探勝の嚆矢を為すは玉龍

万二千峰峻を快覽し

春秋盛夏又寒冬

景観は至極にして天工は妙なり

玉山を遺憾とし富嶽に還る

風塵を後顧し勝境に封じ

神秘と俱に絶頂は端発す

浮沈七十にして東西に渡る

余の豪気販すれども老躬なり

彼岸に達するも玄奥は尽きず

初心を懐憶するも未完に終わる

至宝蓬莱遮るものなく独り

古仙に学び須らく俗夢を滅す

大自然に娯遊し菓を彩る

恩顧に応え万謝し昇龍す

昭和丁酉 春彼岸仲日記

蓬莱山は玉龍

※昭和丁酉=昭和31(1957)年



◆発行日：平成28年1月5日

甘木歴史資料館

◆住所：〒838-0068 福岡県朝倉市甘木216-2

◆TEL/FAX：0946-22-7515

◆http://www.city.asakura.lg.jp/ama-reki/